

解説

問一：語彙力（文脈判断）

正解：3

「こはごはしく」は「強し（こはし）」の形容詞。物理的に「硬い」だけでなく、精神的に「頑固だ・柔軟性がない」という意味。直後の「なさけなき（思いやりがない）」と呼応しており、「物のあはれ」を解さない心の状態を指す。

問二：文脈（重要語）

正解：1

「心ばへ」は「趣・性質・本質」を指す。

「その事（＝経験）に触れなければ、その事の性質はわからない」という論理。2. 功德や3. 戒めは、文章の後半で出てくる「結果」の話であり、ここでは不適。

問三：教養（ことわざ）

正解：2

「子を持ちて親の恩を知る」の対比として、「（子が親の心を知らない状態である）親の心、子知らず」が入る。文脈上、直接の経験がないと理解できない例として挙げられている。

問四：和歌の役割

正解：2

【A】の歌は「子を思ふ道にまどひぬるかな（子を思う道に迷ってしまうことだ）」とあり、親の深い愛情を詠んでいる。本文では、これを聞くことで「親の心は思ひやられて（親の心が推察される）」とあるため、親の気持ちの具体例としての位置づけだ。

問五：修辞技法

正解：1

「をざさはら（小笹原）」と「ふし（節）」が縁語。「ふし」は、竹の「節」と、物事の区切りを意味する「一ふし（一大事）」の掛詞。このセットを見抜くのが和歌問題の急所だ。

問六：副詞（論理の把握）

正解:3

「おのづから(自ずから)」は「自然と」の意。

歌を聞くことで、直接体験しなくても「自然と」親の心がわかり、「自然と」悪いことはしなくなり、「自然と」身の戒めになる……という、歌の持つ自動的な感化力を説明している。

問七: 内容把握(指示語の特定)

正解:2

傍線部直後の「みづからその事に触れねども、その事の心ばへを思ひ知る」という箇所注目。その後「人の情(なさけ)のやうを深く思ひ知る時は」と続いており、筆者は「身の上に思ふ心」を「人の情のやう(人間の感情のありよう)」と言い換えている。

「物のあはれ」は全体のテーマだが、設問の文脈で「何を」汲み取っているのかを問われた場合は、より具体的な「人の情のやう」を選ぶのが読解の正道だ。

問八: 指示語

正解:4

「この外なほ物のあはれを知らするにつきて、その益多かるべきものぞ」の「その益」とは、直前まで延々と語られてきた「歌を詠み、聞くことによって得られる利益」のこと。すなわち**「歌」の益**である。

問九: 文学史(国学)

正解:1

- ・蘭学事始(杉田玄白): 解体新書の翻訳苦労話。
- ・他はすべて本居宣長。
- ・『うひ山ぶみ』: 国学の入門書。
- ・『古事記伝』: 『古事記』の注釈書。
- ・『源氏物語玉の小櫛』: 『源氏物語』の真髓を「物のあはれ」とした評論。

【現代語訳】

また、そのように政治を行う人たちだけに限ったことではない。ただ世間一般の日常の交際においても、この「物のあはれ」ということを理解しない人は、何事に対しても思いやりがなく、心がかたくなで、情け容赦ないことばかりが多いものである。

すべて何事も、実際にその事に直面しなければ、その事の趣(本質)は分からないものであって、裕福な人は貧しい人の心を知らず、若い人は老いた人の心を知らず、男は女の心を知らない。世間のことわざにも「親の心、子知らず」とも、また「子を持ってこそ親の恩は分かる」とも言っているが、(実際に子がいなくても)兼輔の中納言(藤原兼輔)の、

【A】親の心は(闇のように)真っ暗なわけではないけれど、子を思う愛情ゆえに、どうすればよいかわからず(闇の中にいるように)迷ってしまうものなのだなあ。

という歌や、俊成の三位(藤原俊成)が病気で命が限られていた時に、「定家卿の中將転任のことを(天皇に)奏上してほしい」と言って、範光の朝臣(源範光)のもとへ贈られた、

【B】小笹原の笹の葉の上で風を待つ露(のような私の命)が、まだ消え果てないうちに、(息子の出世という)この一つの節目(事柄)を、心残りに思い置くことですよ。

という歌などを聞けば、子供を持たない人であっても、自然と親の心は推し量られて、しみじみと心打たれる(あはれである)ものなのだ。

この他の事柄もすべてこれと同じありさまであって、世間の人々がそれぞれの身分や境遇に応じて(自分のこととして感じる)心(=人の感情のありよう)は、(歌を通して)すべて十分に汲み取って知ることができるので、自分自身が直接その事に直面しなくても、その事の趣(本質)を理解させてくれるもの、それが「歌」なのである。

人間の感情のありようを深く理解した時は、自然と世のため人のために悪い行いはしないものである。これもまた、「物のあはれ」を人に教え知らせる(歌の)功德(功績)である。このように他人の心を汲み取って「あはれだ(しみじみと心打たれる)」と思うことについては、自然と自分自身の戒めになることも多いはずだ。

まずは(先に挙げた)右の歌などを聞いて、親が子を思う情愛を推し量ったならば、(子は)その恩を知って、自然と親不孝な振る舞いはすべきではないと思うようになるに違いない。その他のこともこれになぞらえて考えるべきである。この他にも、やはり「物のあはれ」を知らせることによって、(歌がもたらす)その利益は多いはずのものなのだ。